

「和牛甲子園」の取組評価部門 加茂農林高が最優秀賞



輸入飼料高騰 飼料に工夫、コストも削減

高校生が育てた肉用牛の肉質などを競うJ A全農主催の「第7回和牛甲子園」(1月18、19日)取組評価部門で、加茂農林高校(美濃加茂市本郷町)が最高位である最優秀賞を初受賞した。J A全農岐阜の関係者が5日に同校を訪れ、生徒が育てて出品した飛騨牛の精肉を贈呈した。

和牛甲子園は東京で開か一道府県から41校59頭が出場、岐阜県の3校を含む25した。活動内容を発表する

取組評価と、枝肉評価の2部門で競われた。

取組評価部門で最優秀賞を獲得した加茂農林高は、輸入飼料の価格高騰を受け国内で安定供給が見込める飼料米を含んだ配合飼料を使った肥育のほか、農業高校生として初めてIoT(モノのインターネット)技術を導入し、牛の胃内の温度を測り健康管理をしながら牛を肥育した新しい取り組みに挑戦した。

生産科学科動物専攻飛騨牛プロジェクト班の3年生8人が約1年半をかけて実践し、肉質を維持しながら経費削減に成功したほか、出品した2頭ともA5等級

最優秀賞の表彰状などを披露する(前列左から)橋本美桜さん、秋田風生さん、渡邊煌さん、美濃加茂市本郷町、加茂農林高校

と評価され、うち雌牛「ふくはれ」号は肉にどれだけのサシ(霜降り)が入っているかを表すBMSで最高値を出した。

出場したのは、3年秋田風生さん(18)川見市と橋本美桜さん(18)川辺町、2年渡邊煌さん(17)多治見市の3人。

J A全農岐阜の小島嘉晃

畜産部長から精肉を受け取った橋本さんは「発表を評価してもらい、飛騨牛のPRにつながりうれしい」と話した。秋田さんは「動物相手で思い通りにいかないことはあるが、畜産業の楽しさを知った。この経験を生かし、いつか畜産業に関わりたい」と語った。